

Title	論文：未来共生プラクティカルワークの到達点と課題
Author(s)	榎井, 縁
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 73-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72115
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

未来共生プラクティカルワークの到達点と課題

榎井 縁

大阪大学未来共生プログラム特任准教授

はじめに

本論は、未来共生プログラムの大きな特徴とされる「プラクティカルワーク」について振り返り、その到達点と課題についてまとめようと試みるものである。大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム（以下、未来共生プログラムと略称）は、2012年度に大阪大学に設置され「多様で異なる背景や属性を有する人びとが互いを高め合い、共通の未来に向けた斬新な共生モデルを具体的に草案・実施できる知識・技能・態度・行動力を備えた実践家・研究者」である「未来共生イノベーター」を輩出することを目的としており、2018年度現在は第6期生にあたる履修生までを受け入れ、文部科学省から委嘱された7年間の事業期間が修了、来年度からは大阪大学人間科学研究科に運営主体が移り継続発展を図っていくことになっている。

未来共生プログラムにおいて履修生が身につけるべき知識、能力、態度、行動力は従来大学での教育研究の対象となってきた既存の学問の枠組みからはみでるものであって、未来共生プログラムに関わる教員たちは、プログラム運営に携わりながらも「未来共生」「未来共生学」とは何かという根源的な問いに答えること、「走りながら考えること」が要求されてきた（栗本 2014: 4）。未来共生学を進める三つの領域・アスペクトについて志水は、1) 共生とは何かを追求する「共生のフィロソフィー」、2) 共生に向けての社会の実現を理解する「共生の

サイエンス」、3)共生を実現するための手立てを考える「共生のアート」を唱えた(志水 2014)。中でも問題解決の分野を示す「共生のアート」は、〈いま〉〈ここ〉にまつわる直感、情緒的で属人的な手法や技と重なる現実社会の中の「生き物」としてしか存在しない(榎井・石塚 2017: 246)。その実践の現場とのつながりの中で、プログラムに関わるすべてのものが、必要／十分条件としての「共生」に向けて、何をどう選択し行動するのが問われていることが明らかにされてきた(大阪大学未来戦略機構第五部門 2015: 32-37)。

プラクティカルワークとは、1年次夏季の東北被災地でのコミュニティ・ラーニング、1年次後期の大阪・関西地域での公共サービス・ラーニングと、それを基にした2年次前期のプロジェクト・ラーニング、修士を終えてQEを通過した3年次の海外インターンシップ、4年次の自らのキャリアを考えるフィールド・ラーニングが必修とされ、そのほか選択としてそれらの総合的な力を駆使したソーシャル・アクションⅠ・Ⅱという、プログラムの科目として設定されている。学生たちが大学外のさまざまな実践の場に赴き、現場の人びとと関わり、信頼関係を築くことをとおして課題解決に向けて行動することを、国内外のフィールドで経年的に重ねていくことで、多文化コンピテンシー(多言語リテラシー、フィールドリテラシー、グローバルリテラシー、調査リテラシー、政策リテラシー、コミュニケーションリテラシー)を獲得することを目的としている。

本稿においては、博士前期課程において、プラクティカルワークの基盤づくりとされているコミュニティ・ラーニング、公共サービス・ラーニング、プロジェクト・ラーニングの各取り組みを、入学生年毎にまとめた上で、振り返りながら述べていくこととしたい。

1. コミュニティ・ラーニング(東北被災地で学ぶ)

東北被災地で学ぶコミュニティ・ラーニングは、本プログラムの担当教員(志水宏吉、渥美公秀、稲場圭信)が2011年3月11日東日本大震災以降、それぞれ宮城県南三陸町、岩手県九戸郡野田村、宮城県気仙沼で行ってきた活動を受けて実施されはじめたものである。また、岩手県九戸郡野田村には、東日本大震災の発災直後より野田村において支援活動を行ってきた団体の連携組織が結成

され¹、そこを窓口には大阪大学の教員・学生が復興、交流活動に継続的に参加していたこともあり、未来共生プログラムのサテライトも2012年3月に開設された。

コミュニティ・ラーニングは、被災地におけるコミュニティの復興を現地の人とともに考えることを目的としている。被災地に実際に出向き、被災状況をはじめ地域の歴史と社会的成り立ちを理解し、現地の人びととの対話や協働活動を通じて、被災地のコミュニティの諸課題を知り、復興への道筋を共に考えることを学ぶ、おおよそ10日間の実習である。期間の最初の一週間は3つの被災地でフィールドワークを行い、最後の3日間は全員が野田村のサテライトに集まり、その成果の発表をするというスタイルをとってきた²。

2013年から2018年までの実施内容は次のとおりである³。

1.1 コミュニティ・ラーニングの実施内容

Ⅰ期生：2013年8月18日～27日

2013年8月18日～23日

南三陸班

南三陸町志津川地区伊里前小学校・歌津中学校にて学習支援活動

南三陸町教育委員会、観光協会、漁業(水産加工工場・漁業連合)、農業(花匠園)、商業(商店街)等産業関係者、平成の森仮設住宅自治会長からの聞き取り

気仙沼班

気仙沼市危機管理課元職員による避難所、合同庁舎、魚市場、第18共徳丸の見学

一次避難所となった寺院(青龍寺、清涼院)、神社(早馬神社)の訪問

シャンティ国際ボランティア会を通じた仮設住宅での交流会の企画・実施
漁業組合唐桑支所での聞き取りと牡蠣の稚貝づくりの作業

野田村班

現地踏査、フィールド調査法講義、役場・観光協議会からのヒアリング

野田村の魅力とそれを効果的に伝えるためのフィールドワーク・インタビュー：22人

社会福祉協議会、農家、漁業組合、教師、商工会青年部、役場、工務店、
伝統保存会

コミュニティ FM 放送番組(のだむラジヲ)の企画・制作 4番組の作成

2013年8月26日

成果発表会 野田村サテライト(大阪大学人間科学研究科コモンズルーム遠
隔システム)

南三陸チーム「つながりの種を育てる」

気仙沼チーム「『隔たり』の中で共に生きる」

野田村チーム「非当事者の役割とは:『のだむラジヲ』での活動をとおして」

2期生:2014年8月5日~12日

2014年8月5日~9日

南三陸班

南三陸町志津川小学校避難所「記憶・記録の保存プロジェクト」への参加
事前資料作成 避難所自治会の手書きノートのデジタル化・タイムテーブ
ルの作成、復興計画文書や新聞記事資料の読み込み
志津川地区での集中インタビュー 39人(各1時間半~2時間半)
(2015年3月『志津川小学校避難所記録保存プロジェクトー中間報告書』刊
行)

気仙沼班

気仙沼市役所関係者による災害復興ガイドツアー、市会議員への訪問ヒア
リング
寺院(青龍寺)、神社(早馬神社)の訪問
シャンティ国際ボランティア会でのワークショップ、仮設住宅でのレク
レーションイベント企画・実施、漁業組合でのボランティア作業、市役所
での聞き取り

野田村班

「野田村の復興」を目的としたフィールドワーク
講義、語り部ガイド、三陸鉄道震災学習列車、のだむラジヲ
内諾を得た村民リストからインタビューをリレー式に行う:24人の協力者

インタビューを通じて得られたものをコミュニティラジオのイベント試験
放送に参加

2014年8月11日

成果発表会 野田村サテライト(大阪大学豊中キャンパス、吹田キャンパス
遠隔システム)

南三陸チーム「未来へのメッセージ 志津川小学校避難所それぞれの59日
間」

気仙沼チーム「『つながり』の繋がり」

野田村チーム「震災と復興を考える 『協働』の姿勢から見えてきたもの」

3期生:2015年8月2日~12日

2015年8月2日~7日

南三陸班

「志津川小学校避難所記録の保存プロジェクト」への参加
志津川小学校避難経路フィールドワーク、避難所自治会運営者とのワーク
ショップ
避難所自治会以外の方々へのインタビュー 16人

気仙沼班

「見えないものを見る力」をつけることを目的に「復興」と震災の爪痕をみる
寺、まちづくり支援団体、復興屋台村等と継続的に聞き取りと交流活動を行
う
8月6日「レクイエム・プロジェクト気仙沼2015」への参加

野田村班(8月3日~12日)

野田村中心部見学、三陸鉄道震災学習列車、個別の発想に基づくフィール
ドワーク
内諾を得た村民リストからインタビュー
保育所、三陸鉄道、読み聞かせボランティア、女性の自立、産地直売所な
どのテーマを掘り下げる
コミュニティ FM「のだむラジヲ」番組制作(久慈高校の生徒との協働)

2015年8月9日

成果発表会 野田村サテライト（大阪大学豊中キャンパス、吹田キャンパス
遠隔システム）

南三陸チーム「復興によって見えてきたもの、見えなくなったもの」

気仙沼チーム「『つながり』の広がり」

野田村チーム「野田村の今」(6つの視点から)

4期生：2016年8月17日～25日

2016年8月17日～22日

南三陸班

「志津川小学校避難所自治会記録保存プロジェクト」への参加

避難所後の一人一人を描くためのインタビュー 29人

気仙沼班

「見えないものを見る力」をつけることを目的に「復興」と震災の爪痕をみる
寺、まちづくり支援団体、復興屋台村等と継続的に聞き取りと交流活動を行
う

8月19日「コンポジウム気仙沼2016」への参加

野田村班(8月18日～28日)

野田村中心部見学、三陸鉄道震災学習列車、村の様子のご概観

津波の被害を受けていない山側の集落へのフィールドワーク

「山の人」「海(浜)の人」「山向こうの人(外部者)」の協働について考える

2015年8月24日

成果発表会 野田村サテライト（大阪大学豊中キャンパス、吹田キャンパス
遠隔システム）

南三陸チーム「町の変化と人びとの変化、こころの差異と記録保存プロジェ
クトの意義」

気仙沼チーム「住民、NPO、行政、よそ者の視点から復興への方向性を学ぶ」

野田村チーム「野田村の海の人と山の人との共生、外部者と村の人の共生」

5期生：2017年8月18日～27日⁴

野田村 「みちのく潮風トレイル」(環境省復興事業)復興プロジェクトへの取

り組み

海側、山側、中間部の四つの集落において、村や村民の復興を考える

野田祭りへの出店、村民の方々との交流、ラジオ番組での報告

2017年8月24日

成果発表会 野田村サテライト（大阪大学豊中キャンパス、吹田キャンパス
遠隔システム）

「潮風トレイルと新山」

「和野平地域～人とかかわるトレイル」

「下明内の自然と住民の温かさを感じるトレイルコース」

「日形井地域～手作りマップをもって歩く道」

コミュニティ・ラーニングの成果報告については、『未来共生プログラム
コミュニティ・ラーニング東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書』
2013年、2014年、2015年、2016年、2017年各年度、ならびに『未来共生プロ
グラム2014志津川小学校避難所記録保存プロジェクト中間報告書』『未来共生
プログラム2015志津川小学校避難所記録保存プロジェクト最終報告書』として
発行されたほか、毎年ジャーナル『未来共生学』の「未来共生プログラム コミュ
ニティ・ラーニング」の章に各履修生の参加者によってまとめられた文章が掲
載されている。

1.2 コミュニティ・ラーニング受け入れ先からの評価⁵

コミュニティ・ラーニング受け入れ先から、直接プログラムや受け入れた学
生についての評価をするようなシステムはとられていない。しかし、大阪大学
未来共生イノベーター博士課程プログラム第1回外部評価委員会(2015年7月
17日実施)ならびに第2回外部評価委員会(2018年3月24日実施)において、野
田村の受け入れ窓口でもあり野田村サテライトの協力者でもあるNPO法人久
慈観光協議会専務理事である貫牛利一氏が「現場からの学びについて」という
パートにおいて発言されている。ここではその発言を引用することで受け入れ
先からの評価としたい。

2015年7月のヒアリングでは主に2つの点が評価された。その一つは現場で身につける力である。被災地に入る学生たちからインタビューをするという使命感を感じ、それを崩すことから意識し「おそらく聞けば聞くほど東北人というのは何も言わなくなる。つまりインタビューという場面は、確かに君たちの必要とするプログラムの一つなのかもしれないけれども、結果としてインタビューだということを分からせないような接し方」⁶を提案する。現場に合ったインタビューなどは当初はできないが、現場に入ることによって対応力や適応力を身につける力は素晴らしく、こうした力はリーダーを養成する未来共生プログラムに求められているという。

2つめは、現場と向き合う姿勢である。現場でのフィールドワークとは、震災現場でなくても、結果としてリスクを背負った地域や現場の中から得られるそれぞれの地域の人の声、生の声、本当の声を引き出す時間の必要性があるという。多くの震災現場では多くの学生を受け入れているが、丁寧にそういう活動がされているところはなく、大阪大学の全てがそうであるというわけではないが、その丁寧さは野田村全体に感じているという。高齢者が多い村であるが、学生からエネルギーをもらい、その後繋がりが続ける学生もおり、フィールドワークが村にとってかけがえのないものになっているという。

震災から7年経った2018年のヒアリングでは、村民にとってのプログラムの意味が述べられた。「野田村民とすると、最初のころは『何で大阪大学の学生たちなんだろう』という疑問があったのかもしれないが、継続して毎年実施しているうちに今では普通になってきていて、それが地域側から評価されている」⁷という。村は大学のない過疎地域であるが、学生たちとの交流が普通にできることにより力を出せるようになり復興につながる地域になっていくという。その現場への効果として村民側の交流した、あるいは受け入れた方々への生きがいに近いものが生まれているというのである。

その一方で、学生たちが10日間なりの合宿生活、団体生活をする中に協調し合う努力とそれが上手くできない中での妥協する姿もみられ、昔の言葉でいう「同じ釜の飯を食べる」という生活を共にすることによる変化が、今の子どもたちにも見られるところはいいところでもあると思われる。

このように毎年短期間であっても積み上げられてきた関係性が、将来に渡って拡充されていくために、2018年2月11日に野田村と大阪大学人間科学研究科がOOS協定⁸を締結したことも特記すべきことである。

2. 公共サービス・ラーニングとプロジェクト・ラーニング

公共サービス・ラーニングは、1年次の後期、学生が週に1回の割合で半年にわたって活動を行うというものである。前期はアカデミックな座学が中心となっているが、夏期のコミュニティ・ラーニングを皮切りに、実際現場に出向き、実践の中に身を置きながら本格的な学びを始めるが、その現場は、共生の諸課題に取り組む大阪を中心としたローカルな“足元”となる。

受け入れ先については、毎年どのような共生の課題に取り組む現場に行きたいのかという学生の興味や関心や資質にあった、なるべく研究には重ならない現場を、学生と教員で検討しながら探り当てる。うまく見つからない場合は教員側から代替案を提示することもある。2年目以降は受け入れの前例ができていたために、以前と重複した場を希望する学生も出ている。

この6年間で、60以上の組織や団体がプログラムの趣旨を理解し協力関係を結び、学生を受け入れ育ててくれている。受け入れの現場のカテゴリーは、大きくわけて、①役所などの行政や男女共同参画センターや国際交流センター、社会福祉協議会や人権関連センターなど行政の外郭団体などの公共団体や施設、②公立小中学校・高等学校、国際学校や民族学校など学校関係、③NGO・NPOなどの市民活動団体や財団や任意団体など、おおよそ3つに分類することができる。また、組織や団体の活動分野としては、まちづくり、福祉(高齢者、障害者)、ジェンダー・男女共同参画、多文化共生(外国人支援)、国際交流・国際協力、格差・貧困、差別、健康・病、マイノリティ、人権、公害・災害・防災など多岐にわたっている。

受け入れの形態は様々であり、先方にはインターンシップと違い特別に仕事やプログラムをつくらないようお願いすると同時に、受け入れていただいてもまったく役に立たない状況もあり得ることを断っている。学生は現場での体験を日報にして、教員も含めた小グループで共有し、定期的に場を設けて、ふ

り返り、活動の改善に向けての相談なども行っている。年度末には自分が活動をとおして学んだ成果を受け入れ団体に発表し、報告書を作成している。半年間、現場に赴き活動に参加することで、それぞれが自分なりの共生の課題について見出し、問題意識を共有するようになっていく。

翌年度の2年次は、公共サービス・ラーニングをベースに、幾つかのチームとなって受け入れ組織や団体にプロジェクトを提案し、実施までを半年間で行うプロジェクト・ラーニングが試みられており、この6年間で17のプロジェクトが学生チームと組織団体との協働により試みられている。

プロジェクト・ラーニングも週一回ペースでチーム毎に週報を出す。プロジェクトに僅かながら予算がつくため、予算執行のための手続きについて未来共生プログラムの事務からも学びながら、教職員と協力してプロジェクト実現に向けての活動を行う。2年次の後期はそれぞれが修論の執筆に取り掛かるために、半年という余裕がない状況の中でチームワークが試されることとなる。プロジェクト・ラーニングについても、関係団体に来ていただき、活動成果の報告会ならびに報告書の作成を行っている。

2013年度から2018年度までの実施状況は、次のとおりである。

2.1 公共サービス・ラーニングとプロジェクト・ラーニングの実施状況

次頁からの表1を参照。

2.2 公共サービス・ラーニング受け入れ先からの評価

公共サービス・ラーニングは、その期間が終了した際に最終報告会を行うとともに意見交換を重ねた上で報告書を取りまとめ、年度末に受け入れ先の担当者を招き、成果発表会を行っている。この成果発表会は、経験をとりまとめ発表することで受け入れ団体と学生、未来プログラムの三者が互いに交流する機会ともなっている。

公共サービス・ラーニングの受け入れ先からの評価は、こうした発表会等でのコメントや、受け入れ団体から提出される「受け入れ団体コメント」、前述の2回の外部評価委員会でのヒアリングであるが、主に学生の活動への評価とプログラムへの団体としての評価にまとめられる。以下はその関係資料からの引

用であり、コメントした団体と年を付記することとする。

まず、学生の活動の評価としてはそれぞれの団体での奮闘ぶりが、課題への関心の高さ、主体性、積極性、正確性、自主性、丁寧な姿勢、等といったことで表現されていた。

ただ、このような評価については、最初からそうであったわけではなく、変わっていったともいえる。「急にじゃなく、すごくいろんなことを考えて、自分と置き換えて、学んでいったと思う」と表現し、「そういう場所を提供できたことが、わたしたちもものすごくいい勉強になり、刺激になった」(しょうないガダバ 2018)と捉えた団体もあった。

また、受け入れ団体自身が学生の活動を通して「当センターのめざしている目標に照らし、その成果と若い人の外からの視点で評価してもらうこと」(ヒューライツ大阪 2014)等を求められていることもあり、それに十分応えられたとは言い難い側面もあった。しかし「販促に関するアイデアを提案してくれたこと、外から新鮮な目が入ってよい刺激をもらった」(エスペロ 2014)というものもあった。

学生たちが特に理解することが困難だったものはそれぞれの組織や団体の持つ形態や体制とその文脈であり、寄附や助成金があって活動が成立するようなNGO・NPO、共生への課題があっても公共という足枷がある公益団体等へのやや理想的な批判的な意見が聞かれた一方で、「組織の一員として働く姿勢や自身の判断だけに依らず確認作業を行いながら業務を遂行する大切さを指導できたことは学生の今後の成長に繋がる」(関西NGO協議会 2016)といった組織や団体側からの理解も見られた。

プログラムの評価としては、「自由度の高いプログラムで、内容や形式にこだわらず学生と現場に任されることで受け入れ側はやりやすく、学生の自由な発想や積極性が生かされるところがすばらしいと思う。現場への良い効果というのは、一方的でなく双方向であること。学校の中から外に目を向ける一つの窓口をもらったと思う」(北大阪朝鮮初中級学校 2018)、「5年も受け入れていると、未来共生とは何か、共生とは何かということにやっと来た気がする。本当にいろんな人たちが共にいきていくにはどうしたらいいか、というのを身を

表1: 公共サービス・ラーニングとプロジェクト・ラーニングの実施状況

1期生		公共サービス・ラーニング1年次(2013)		
所属	受け入れ先	分野	共生の課題	活動内容
文学研究科	コリア国際学園	多文化共生	新たな国際学校での教育実践	リベラルアーツ授業企画と実施
言語文化研究科	NPO法人 多言語センター (FACIL)	多文化共生	多文化な子どもたちの表現活動	プログラムや催事の補助
工学研究科	北大阪朝鮮初中級学校	多文化共生	伝統的民族学校・民族教育の実践	可能な教科の支援、行事への参加
国際公共政策研究科	茨木市立 郡山小学校	多文化共生	中国ルーツの子どもへの教育	教科支援・日本語と母語支援・異文化理解指導
人間科学研究科	大阪府立 門真なみはや高等学校	多文化共生	外国人生徒枠をもつ高校	日本語、学力支援補助、国際理解教育実施
国際公共政策研究科	一般財団法人 アジア・太平洋人権情報センター	国際人権	情報センター、国際人権の普及	ホームページの更新、イベントの補助、機関誌投稿
言語文化研究科	一般財団法人 大阪市男女共同参画のまち創生協会 クレオ大阪	ジェンダー	ジェンダー関係、男女共同参画の実態	資料整理、催事手伝い、企画への意見
人間科学研究科	一般財団法人 とよなか男女共同参画推進センター すてつび	ジェンダー	男性性と暴力	情報ライブラリーでの業務、図書テーマ展示案作成
法学研究科	大阪府大阪市 港区役所	まちづくり	まちづくり支援課で課題発掘と事業実施	子どもの学力向上に関する調査研究
人間科学研究科	大阪人権博物館 リバティ大阪	差別・人権	人権博物館での展示活動	事務作業、資料整理、展示活動の企画・手伝い
人間科学研究科	豊中市立 野畑小学校	障害・包摂	インクルーシブ教育・多様なニーズのある児童	ニーズのある児童への教育補助
人間科学研究科	Minamiこども教室	共生・貧困	外国ルーツの子どもへの地域教育支援	外国ルーツの子どもへの地域教育支援
人間科学研究科	NPO法人 プラス・アーツ	防災・まちづくり	まちづくりと防災活動	事業(ヒアリング調査)や催事の手伝い
人間科学研究科	フェアトレード雑貨 エスペロ	国際協力	自立支援のためのフェアトレードの普及	店や市民向けイベントの手伝い、展示への提案
人間科学研究科	社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会	福祉	地域福祉活動の推進・CSWの活動	事務作業、地域訪問、視察、会議参加、調査補助

2期生		公共サービス・ラーニング1年次(2014)		
所属	受け入れ先	分野	共生の課題	活動内容
人間科学研究科	茨木市立 市民文化部 人権・男女共生課 豊川いのち・愛・夢センター	差別・人権	地域でのコミュニティ形成	コミュニティセンターとしての催事の手伝い、相談
人間科学研究科	大阪府立 西成高等学校	格差・貧困	反貧困学習	事務作業、総合学習での授業
言語文化研究科	コリア国際学園	多文化共生	インターナショナルスクールでの教育実践	学校事務の補助、生徒相談と新入生への日本語補助
人間科学研究科	大阪市立 南小学校	多文化共生・貧困	外国にツールを持つ子ども多数在籍校	学級補助、日本語教室手伝い、外国語活動(英語)
文学研究科	NPO法人 日本災害救援ネットワーク	防災・減災	災害救済にかかわるネットワークの実践	阪神大震災以降の支援情報のとりまとめ
言語文化研究科	大阪市立 長池小学校	多文化共生	帰国した子どものセンター校・日本語適応指導	日本語学習の支援
人間科学研究科	関西沖縄文庫	差別・沖縄	オーラルヒストリー原稿作成、催事手伝い	情報ライブラリーでの業務、図書テーマ展示案作成

1期生		プロジェクト・ラーニング2年次(2014)		
協働相手	プロジェクト名	プロジェクト内容	具体的活動	
コリア国際学園	のいるプロジェクト(*のいる=not in rush)	p4c(pholosophy for children)を通じたセーフ・コミュニティの形成	p4cの実施:KIS,大阪大学留学生、合同セッション(3回)	
一般財団法人アジア太平洋人権情報センター	まちと人と共生	人権をテーマに若い世代とともに探る地域の共生社会	「大人の選足」の企画と実施(2回)	
大阪市港区役所	37プロジェクト	子どもの居場所づくりに取り組むボランティアの養成	子ども支援をする活動団体(4)への調査、ボランティア養成講座の実施(4回)	
岩手県九戸郡野田村	未来架橋プロジェクト	セミナーとラジオを通じた野田村の復興、野田村と大阪間のネットワーク	セミナー開催(復興コース1回子どもコース2回)ラジオ試験放送(3回)	

2期生		プロジェクト・ラーニング2年次(2015)		
協働相手	プロジェクト名	プロジェクト内容	具体的活動	
茨木市立豊川いのち・愛・ゆめセンター	豊川×未来共生(T×R)	住民主体の持続可能なコミュニティを目指した交流促進プロジェクト	公開講座開催(3回)ふれあい菜園の運営	
西宮市社会福祉協議会	甲六今月どないする(*甲六=甲子園口六丁目団地)	高齢化が進む復興住宅におけるコミュニティ再生の促進	住民の交流を意識した催事の実施(2回:七夕まつり・回想カルタ&トランプ大会)	

言語文化研究科	大阪府大阪市 港区役所	まちづくり	まちづくり支援課で課題発掘と事業実施	性的少数者のパネル展示、LGBTセミナー実施
法学研究科	ラブとよネット	共生・まちづくり	地域におけるまちづくりの実践	まちづくり関係者へのヒアリング、まとめ
国際公共政策研究科	NPO法人 神戸ユニバーサルツーリズムセンター	障害・まちづくり	ユニバーサルツーリズムの取り組み	情報誌発信の補助、催事の補助
医学系研究科	枚方市 保健センター	ウェルネス	外国人の母親たちの保健所利用促進	外国人母子参加のための検診等の補助
医学系研究科	MASH大阪	差別・病	HIVに関する調査と啓発活動	調査の補助、会議(学会)への参加、啓発活動
医学系研究科	豊中市立 野畑小学校	障害・包摂	特別支援教育・インクルーシブ教育	学生サポーターとしての活動、保健室活動
言語文化研究科	NPO法人 こえとことばとこころの部屋コラム	差別・高齢者	西成地域におけるコミュニティ支援活動	事務作業、催事手伝い

大阪市港区役所	港区ダイバーシティ・ネットワーク	LGBTを中心としたアライアンスな場とネットワークづくり	区内関係団体への訪問、ろうLGBTセミナーの実施(1回)
枚方市保健センター	インターナショナルシティ・HIRAKATA	乳幼児のいる外国人女性と保健センターをつなげるプロジェクト	市内日本語教室への調査、外国人対象の離乳食講座の実施(1回)

3期生		公共サービス・ラーニング1年次(2015)		
所属	受け入れ先	分野	共生の課題	活動内容
国際公共政策研究科	一般財団法人 アジア・太平洋人権情報センター	国際人権	情報センター、国際人権の普及	ホームページの更新、セミナー運営補助、機関誌記事作成、翻訳作業
人間科学研究科	一般財団法人 とよなか男女共同参画推進センター すてっぷ	ジェンダー	男女共同参画推進・女性差別撤廃	催事運営補助、アンケート集計
国際公共政策研究科	NPO法人 関西 NGO協議会	国際協力	関西の国際協力・援助団体ネットワーク	ワンワールド・フェスティバルfor Youthの運営
人間科学研究科	NPO法人 子どもの里	子どもの貧困	貧困地域での学童保育、ファミリーホーム、保護	子どもとの活動(遊び、宿題、おやつ、イベント)
国際公共政策研究科	公益社団法人 アジア協会 アジア友の会	国際協力	途上国への支援、国際交流事業、啓発事業	事務作業、地域イベント(講座、募金など)の手伝い
国際公共政策研究科	大阪市立 長池小学校	多文化共生	帰国した子どものセンター校としての日本語適応指導	日本語学習の支援
人間科学研究科	公益財団法人 とよなか国際交流協会	多文化共生	市民参加による多文化共生社会の創出	図書管理、セミナー・イベントの手伝い、母語教室(2014年実施)
人間科学研究科	大阪府大阪市 港区役所	まちづくり	まちづくり支援課で課題発掘と事業実施	家庭学習の手引き作成、スクールソーシャルワーカーへの聞き取り
人間科学研究科	豊中市社会福祉協議会	福祉	地域福祉活動の推進・CSWの活動	物販業務の補助、セミナー運営補助
医学系研究科	公益財団法人 大阪国際交流センター i-house	国際交流	外国人相談、国際に関するインフォメーションセンター	翻訳作業、配布資料準備、相談記録入力、発送
医学系研究科	豊中市社会福祉協議会	福祉	高齢者医療介護の地域移行	高齢者とその家族への支援実務の補助
文学研究科	公益財団法人 吹田市文化振興事業団 メシアンター	文化・まちづくり	市民の文化活動の振興、文化芸術への市民参加	市民参加型事業(子ども、大学)の手伝い
人間科学研究科	NPO法人 コリアNGOセンター	差別・多文化共生	人権、平和、共生を軸にした在日コリアンの活動	物販業務の補助、セミナー運営補助、展示会実施
人間科学研究科	豊中市立 桜井谷小学校	多文化共生	外国につながる子どもへの支援	入り込み支援、昼休み宿題指導、関係者情報共有

3期生		プロジェクト・ラーニング2年次(2016)	
協働相手	プロジェクト名	プロジェクト内容	具体的活動
一般財団法人アジア太平洋人権情報センター	リビングライブラリー ひとを	リビングライブラリーによる相互交流と人権を考える対話の場づくり	リビングライブラリーの研究・インタビューを経て、自分たちが本となるリビングライブラリーを実施(2回)
公益社団法人 アジア協会アジア友の会	日本の多様性プロジェクト:JFC(ジャパニーズ・フィリピン・チルドレン)から見る日本社会	アジアの一員である日本のなかの多様性を体感身近にある課題を感じ、アジア・日本・自分自身をとらえなおす試み	企画前調査:インタビュー・セミナーへの参加(7カ所)、イベントの実施(1回)
大阪市港区役所	コトバのみなと計画	ディスレクシアの人びとが社会参加できる社会構築に向けた知識・啓発・環境を整える	書籍・先行研究のレビュー、関連団体のピックアップと訪問、講演会の実施(1回)
豊中市桜塚校区福祉会「小さなくりの木会」	「小さなくりの木会23年のあゆみ」活動500回記念誌の作成	介護支援グループのボランティア・利用者・家族の思いと経験を、対話を通じて共有・発信する	毎回のミニディサービスでの参加者との交流、ワーク、関係者のインタビュー、活動500回記念誌の作成

4期生		公共サービス・ラーニング1年次(2016)		
所属	受け入れ先	分野	共生の課題	活動内容
言語文化研究科	NPO法人 おおさか子ども多文化センター	多文化共生	外国にルーツを持つ子どもの教育支援リソースセンター	外国人児童生徒の教育に関する資料情報の収集
人間科学研究科	NPO法人 コリアNGOセンター	差別・多文化共生	人権、平和、共生を軸にした在日コリアンの活動	催事運営補助、物販事務の補助
人間科学研究科	関西沖繩文庫	沖縄問題	私設図書館・人と人を繋ぐ・琉球人の集いの場	書籍リスト作成、多文化体験、コミュニケーション
人間科学研究科	北大阪朝鮮初中級学校	民族差別	ルーツを大事にしながら日本・国際社会で生きる	土曜児童教室補助・学校行事手伝い
言語文化研究科	大阪市立 市岡中学校	多文化共生	帰国した子どものセンター校・日本語適応指導	日本語学習の支援
人間科学研究科	しょうないガダバ	居場所づくり	だれにでもひらかれた居場所づくり	プロジェクト手伝い、勉強会補助
工学研究科	しょうないガダバ	居場所づくり	人びとの集う場の構築	放課後学習、地域活動への参加(2015実施)
医学系研究科	NPO法人 とよなかESDネットワーク	環境・まちづくり	学校、地域、市民にむけた学びのサポート	カフェ、授業、研修などの補助や手伝い
人間科学研究科	一般財団法人 とよなか男女共同参画推進センター すてっぷ	ジェンダー	女性の相談・自立に向けた支援	講座の補助作業、アンケート集計
文学研究科	NPO法人 こえとことばとこころの部屋コロム	差別・高齢者	西成地域におけるコミュニティ支援活動	事務作業、宿泊運営総務、催事手伝い
人間科学研究科	箕面市立 萱野中央人権文化センター「らいとびあ21」	差別・人権	地域のネットワークづくり	子どもや若者を対象としたイベントの手伝い
法学研究科	MASH大阪	差別・病	HIVに関する調査と啓発活動	調査の補助、啓発活動、広報活動
国際公共政策研究科	公益財団法人 あおぞら財団	公害・まちづくり	公害に関する地域活動	研修、海外訪問団(中国)との交流、イベント手伝い
人間科学研究科	NPO法人 子どもの里	子どもの貧困	ホームレス、しんどい子どもたち、西成という地域での活動	子どもとの活動(遊び、宿題、おやつ、イベント)
人間科学研究科	公益財団法人 大阪YWCA	共生・まちづくり	地域や課題に対する奉仕活動	日本語支援、バザー準備、助成金申請の作成

5期生		公共サービス・ラーニング1年次(2017)		
所属	受け入れ先	分野	共生の課題	活動内容
言語文化研究科	北大阪朝鮮初中級学校	多文化共生	現実と認識のずれ、無知であること	英語の授業・イベントの手伝い
言語文化研究科	豊中市桜塚校区福祉会おしゃべりサロン「なかよし」	高齢者	介護や生活に関する情報交換の場	会場の準備、お茶出し、食器洗い、利用者との話
言語文化研究科	しょうないガダバ	居場所づくり	とりこぼされる人との共生	放課後学習、イベント手伝い
人間科学研究科	大阪府立 西成高等学校	格差・貧困	高校生のための居場所・カフェ	となりカフェの運営手伝い
国際公共政策研究科	NPO法人 クロスベイス	格差・貧困	差別と貧困をなくすための子どもの支援活動	イベントの企画と補助、調査
人間科学研究科	若者居場所ぐーてん 子ども食堂	格差・貧困	就労支援、若者や子どもの居場所づくり	若者の居場所づくりと子ども食堂の補助
人間科学研究科	公益財団法人 とよなか国流交流協会	多文化共生	市民参加による多文化共生社会の創出	事業補助
人間科学研究科	箕面市立 萱野小学校	人権教育	学力保障・特別支援教育重視	学習支援・気になる子どもについてのメモとり

4期生		プロジェクト・ラーニング2年次(2017)		
協働相手	プロジェクト名	プロジェクト内容	具体的活動	
NPO法人 おおさか子ども多文化センター	「やさしい日本語」によるコミュニケーション	日本語を母語としない生徒の教科学習の困難を「やさしい(易しい/優しい)日本語の観点からのりこえる	現場からのヒアリング(3カ所)、講演会とワークショップの実施(1回)、アンケートのまとめと分析	
しょうないガダバ	ガダバ探偵団	居場所づくりの多面性を明らかにし、地域に「居場所」の芽を吹かせる	関係者へのインタビュー(4人)、関連団体へのインタビュー(3団体)、3団体を巻き込んだイベントの企画と実施(1回)	
箕面市立 萱野中央人権文化センター「らいとびあ21」	子どもと防災体験 by らいとびあ×阪大	地域でつながりの弱い人とつながるための、防災町歩き・避難シミュレーション	保護者対象のご飯会と説明(2回)、防災まちあるきと避難体験の実施(1回)	

5期生		プロジェクト・ラーニング2年次(2018)		
協働相手	プロジェクト名	プロジェクト内容	具体的活動	
北大阪朝鮮初中級学校	ごんみょん公明-Resonance-Project	在日コリアンに対する差別やそれを生み出している無知を多数派が自覚するための周知	Sutdy session(読書会、セミナー参加、デモへの参加) Event session(2回)	
大阪府立 西成高等学校	ホンネカナルカフェ(案)よろしいだけ販売(案)	困難を抱えた生徒が地域と連携することで中退や早期離職を防止する企画	チームビルディングの失敗、趣旨の説明不足、スケジュール管理不足、教員とのコミュニケーション不足により断念	

持って知るいいきっかけになっていると一緒にいて感じます」(しょうないガダバ 2018)など、年月を重ねる中で認識が深まっており、まさに公共サービス・ラーニングそのものが、受け入れ団体と共につくりあげていることがうかがわれた。

プログラムの改善点としては、カリキュラムの都合を優先するために、日程が限定されていること、前期で必ず終了させることなど、特に学校や役所等とは違いルーティーンのない活動がない団体や、職員やスタッフ数が限られている組織などにおいては受け入れが負担になる側面も見られた。これらについては、プログラムと団体間のより丁寧なやりとりや実施に向けての計画が立てられるべきであろう。

2.3 プロジェクト・ラーニング受け入れ先からの評価

プロジェクト・ラーニングは、中間報告会、その期間が終了した際に最終報告会を行うとともに報告書を取りまとめ、受け入れ先の担当者を招き、成果発表会を行っている。中間報告会ではプログラム関係者からの助言を主にもらい、成果発表会では、プロジェクトに対する現場からの意見、助言をいただき、現場課題に取り組んでいく未来共生イノベーターとしての姿勢を捉え直す機会ともなっている。

まず中間報告会では、学生たちの立場や認識を受け入れ先との違いにおいて擦り合わせることの難しさ、さまざまな関係者や関係機関との協働不足やプロジェクト・ラーニング終了後のプロジェクトの現場における継続性⁹、理念や目標が大きく市民・住民が主体的にかかわっていくような仕掛けや工夫の具体性の弱さ、どのような相乗効果や意義があるのか、「PDCA (plan, do, check, action) サイクル」の意識化¹⁰、現場の課題と乖離した「押し付け」や、現場の「下請け」的プロジェクトでもないオリジナリティを追求すること¹¹、などが課題として指摘されている。

最終的な評価としては、プロジェクト毎に様々ではあるが、大きく分けて2つの評価がなされていたと考えられる。その一つは、学生たちの思いが形になっていく失敗も含んだ葛藤の過程を見守りながら支え、やり遂げて行くことへの眼差しとしての承認である。「最初に思いがあっても、それがどのように整理

されていくのかという学生たちの取り組みの過程を見せてもらった。じぶんたちはNPOなので企画したことにはモノは言わず、具体化する中での助言を行ってきた。激論もあり手探り状態が続いた。そうした中での企画はチームで取り組んでいく突破力のようなものを感じた」(NPO法人おおさかこども多文化センター 2017)。「何一ついわず、自由にやりなさいといったが、話せば話すほど混沌とする状況だった。その中で学生たちが知りたいという思いを継続して3団体にインタビューし、対話のセッションを企画したことは大きかった。そのことを最後まで投げださなかった事に感謝したいし、学生たちが地域をつなぎ、新たな関係を生み出してくれた」(しょうないガダバ 2017)。「23年前に始めたミニディサービスが500回を迎え、関係機関もなく定着したスタッフの中、老老介護の状況になっていた。学生たちは活動の危機を感じ宣伝広告的な活動やイベントを企画していたが、部外者が単発的に何かを持ちこむことに違和感を覚え、ミニディサービスに参加する中で利用者やボランティアの声を聞く中で記念誌作成をプロジェクトとして遂行してくれた。地域の中で暮らすことの大切さが記録されたことが嬉しい」(小さなくりの木会 2016)。受け入れ団体が学生たちを過大評価・過小評価することなく、ありのままの姿に伴走した結果の声であるとも受け取ることができる。

もう一つは、プロジェクト・ラーニングを自分たちなりに位置づけ、大阪大学未来共生プログラムとのコラボレーションだからこそできたとする事業の一環としての評価である。過去3回プロジェクト・ラーニングを実施した大阪市港区は、「区役所では地域の課題がさまざまあることから、取り組みたいと思っても人的制約があり、啓発にとどまっていたり具体の事業ができないことがたくさんある。来た大学生がやりたいと取り組みれば様々な制約を乗り越えることもでき、かつ行政に参加しにくい若い層を巻き込むきっかけとして行う場合、大阪大学との協働であるために発信力が増す」¹²という。「やりたいと思っていたイベントを、大学の受け入れをすることで一緒にできた。途中でふり返りを行い、企画を修正するなど妥協をすることなく真摯に遂行することができたと思っている。参加者からは防災という視点で街歩きをしたことが大きく、イベントを通して新たな側面が見えたという声が大きかった。いずれにせよ、子どもも大人も巻き込むために学生がよく動いてくれた」(NPO法人暮らしづくり

ネットワーク北芝 2017) というように協働への評価が伺えるプロジェクトもあった。「学生たちは『机上の空論』ではなく生きた勉強をすることを大切に考えてくれていた。当事者から話を聞く機会を設定し、イベント参加者のネットワークづくりを試みてくれ、プロジェクトを振り返り無関心な人への上手な広報の仕方やその限界を感じるなど真摯に取り組んでくれたことが団体にとっても学びになった」(公益財団法人アジア協会アジア友の会 2016) など、プロジェクトからの収穫を述べる団体もあった。

プログラムの改善点としては、公共サービス・ラーニングに増して前期の1セメスター中にプロジェクトを終了しなくてはならないというスケジュールの猶予のなさが一番に挙げられる。プロジェクト・ラーニングは公共サービス・ラーニングの中で学生が見出した共生の課題に対するプロジェクトをチームで企画実施するものであるが、現場との調整において必ずプロジェクトの軌道修正や変更が余儀なくされる。その上チームビルディングを同時並行的に行っていかななくてはならないため、十分にプロジェクトが全うできず現場へ負担をかけるリスクも高く、指導を担当する教員の介入も時には辞さないというのが現状である。そうしたことも含め、受け入れ団体との信頼関係なしではプログラム遂行は難しく、プログラムの将来的展望に期待をかけられている側面もあるといえる。

おわりに

本稿では、プラクティカルワークのベースとなるプログラム履修生がその1、2年次必修で取り組む「コミュニティ・ラーニング」ならびに「公共サービス・ラーニング」「プロジェクト・ラーニング」の6年間の取り組みを概観し、現場から寄せられた評価についてまとめるということを試みた。そこには多くの団体・組織がプログラムに対する信頼関係の中で学生の成長を見守り、またプログラムに合わせ、時にはプログラムに期待をしながら協働をしてきたことが浮き彫りにされた。本プログラムで外部評価委員をつとめた宮島喬氏は「未来共生という課題に目を拓かせることにより、高度な実践力・企画力を備えた新しいタイプの研究者を生み出す期待あふれるプログラムであり共感する点が多い」¹³

とした上でも、多文化共生を考えた場合、上からの統治とは異なる共に治める「^{きょうじ}共治」がどうあるべきか、地域集団、NPO/NGOに固有の地位を与えるシステムとはどういうものかを考える必要について強調した¹⁴。実証のための現場(フィールド)ではなく、社会への実践的関与(engagement)への心組みを今後どのように仕組みとしてつくっていくのかが問われているといえよう¹⁵。

「走りながら考え」続けてきたプラクティカルワークの教員たちは、そうした経緯もあり、本誌『未来共生学』の第4号、第5号において、特集「未来共生プラクティカルワークの現場から」を組み、プログラムを通して関係性をつくることのできた団体の取り組みや課題を言語化することを試みた。それは「まさに今、ここで起きている共生の課題に挑むそれぞれの姿勢から、私たちがいかに深く学び、つながり、行動していくか」を議論すべき時期が到来していたからである。第4号では現場で学ぶべき共生の諸課題とその活動や知恵を5つの現場で考察し、第5号では6つの現場をとりあげ考察した上で現場に立つ側、学生を受け入れてくださった方からの思いも寄せてもらうことができた。山本(2018)は、サイエンスやフィロソフィーからのアプローチでは表現できない現実の厚みが「共生のアート」にあるとし、学術領域に位置するサイエンスやフィロソフィーにアートが従属するわけでない¹⁶と指摘している。未来共生学においてこのアートの意味をより深く追求していくことが今後さらに求められており、今後も「走りながら考える」作業は継続していくと思われる。

注

- 1 「チーム北リアス」という加盟団体・個人からなる有志ネットワークである。そこには京都大学、関西学院大学、首都大学東京、大阪大学などのボランティアグループが参加していた。
- 2 2016年までは3地域での実習を行っていたが、人数の関係で2017年、2018年は野田村のみでの実習となっている。
- 3 活動の内容については、『未来共生プログラムコミュニティ・ラーニング 東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書』(2013年、2014年、2015年、2016年、2017年)、および『未来共生イノベーター博士課程プログラム年次報告書』(平成24・25年度、26年度、27年度、28年度、29年度)から引用した。
- 4 履修生だけでなく人間科学研究科との合併授業を受講した学生も加わった。

- 5 コミュニティ・ラーニングの受け入れ先からの評価は、主に未来共生イノベーター博士課程プログラム第一回外部評価委員会報告書ならびに第二回外部評価委員会報告書からの引用である。
- 6 『未来共生イノベーター博士課程プログラム第1回外部評価委員会報告書』 p.57。
- 7 『未来共生イノベーター博士課程プログラム第2回外部評価委員会報告書』 p.54。
- 8 OOS (大阪大学オムニサイト)とは大阪大学人間科学研究科付属「未来共創センター」のプロジェクトの一つであり、支え合う社会、共生社会を創造していくため、産官社学連携を進めるもので、人間科学研究科および協定を締結した組織が主体となり様々な活動や交流を行うものである。
- 9 『未来共生イノベーター博士課程プログラム平成26年度年次報告書』 p.49。
- 10 『未来共生イノベーター博士課程プログラム平成27年度年次報告書』 p.52。
- 11 『未来共生イノベーター博士課程プログラム平成28年度年次報告書』 p.50。
- 12 『未来共生イノベーター博士課程プログラム第1回外部評価委員会報告書』 pp.59-60。
- 13 『未来共生イノベーター博士課程プログラム第1回外部評価委員会報告書』 p.43。
- 14 同上。
- 15 ここでいう社会についてはアーリ (2006)のこのような移動やハイブリディを含めた動的な捉え方が必要だといえる。

参考文献

アーリ、ジョン

2006 『社会を越える社会学——移動・環境・シティズンシップ』法政大学出版局。

石塚裕子・榎井緑

2017 「未来共生プラクティカルワークの現場から」『未来共生学』4: 245-250、大阪大学未来戦略機構第五部門。

大阪大学未来戦略機構第五部門

2015 『未来共生イノベーター博士課程プログラム平成24・25年度年次報告書』。

栗本英世

2014 「『未来共生学』創刊にあたって」『未来共生学』1: 3-5、大阪大学未来戦略機構第五部門。

志水宏吉

2014 「未来共生学の構築に向けて」『未来共生学』1: 27-50、大阪大学未来戦略機構第五部門。

山本晃輔

2018 「未来共生学と共生のアート」『未来共生学』5: 359-374、大阪大学未来戦略機構第五部門。